

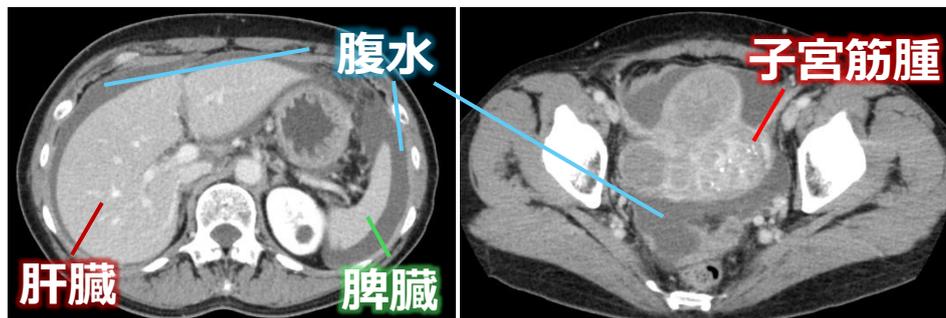
腹膜がん（ふくまくがん）

腹膜がんについて

腹膜がんは、お腹の内側を覆う膜（腹膜）と腹水の中にがん細胞が存在する病気です。がん細胞としては、高異型度漿液性がん（こういけいどしようえきせいがん）が多く、これは卵管がん・卵巣がんと似た病態を示します。最近の仮説によると、高異型度漿液性がんは卵管から生じることが多く、卵管がん（卵巣がん）の場合、卵管・卵巣の腫大とがん性腹水を認めますが、腹膜がんでは、卵巣腫大は見られないことが特徴になります。ただし、腹膜がん以外にも腹水が貯留する病気はありますので、腹水中のがん細胞の有無を検査することが重要になります。

腹膜がんの症例

図1 腹膜がんの造影 CT 画像



60歳代女性、子宮頸がん検診で異常を指摘され、異常な腹水貯留を認めました。そして、画像上、肝臓や脾臓周囲に及ぶまで腹水を認めました（左図）。また、細かい腹膜播種病変も指摘されますが、卵巣の腫大は認めず（右図）、腹膜がんと診断されました。

症状について

腹膜がんは、進行するまで症状が出にくいことが特徴です。腹水貯留に伴う腹部膨満感、倦怠感などが生じます。

診断について

腹部膨満感などの症状で病院を受診した場合、超音波検査、CT検査、MRI検査などを使って、腹水の量や卵巣の腫れなどの所見を調べます。これらの検査で卵巣腫瘍がなく、腹水が著しく貯留している場合、腹膜がんが疑われます。この場合、腹水を採取して細胞診を行うか、手術で腹腔内を観察し、腹水や腹膜の病変を採取します。検査の結果、がん細胞が見つければ、腹膜がんと診断されます。

治療について

腹膜がんに対して、卵巣がんと同様の治療方法が行われます。つまり、パクリタキセルとカルボプラチンを中心とした抗がん剤治療を行い、がん細胞とがん性腹水の改善を図ります。そして、腹膜病変が明らかで摘出可能な場合、手術により病変を摘出します。その後、卵巣がんと同様に、分子標的薬を使った維持療法を行い、再発を予防します。

執筆者

- 氏名： 吉田 康将（よしだ こうすけ）
- 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
- 診療科： 産婦人科